

「ついに...プリミルの元についちゃったのね」

「ああ」

「長かったわね」

ルイズ、キュルケ、ギーシュの三人は今までの冒険の旅を思い出していた。

「さらば黄金勇者 ~ プリミルよ、永遠に~」

きっかけはルイズがサモンサーヴァントで宝石を召喚したことだった。
召喚された宝石はパワーストーンと呼ばれるかつてプリミルに仕えし勇者が封印された石であった。
ルイズはその封印を解くことにより、勇者の主となったのだ。
その勇者・ドランはルイズにこう告げる。

「全ての勇者を目覚めさせプリミルの元へお向かい下さい、
さすればプリミルは主たちに虚無の力をお授けになるでしょう」

かくしてルイズたちの冒険の旅が始まった。

ガリアへ、ゲルマニアへ、ラドグリアン湖の湖底へ、アルピオン大陸の内部へ、聖地へ、東方へ。
文字どおり世界を股にかける大冒険の末に全ての勇者を目覚めさせたルイズたちは、
プリミルがなんと星の彼方にいることを突き止めた。
かくしてトリステインを飛び出し、ハルケギニアを飛び出し、聖地を越え、
ロバ・アル・カリイエすら踏破した少年少女達はついに星をも飛び出し星海をかける旅に出たのであった。

だがその旅は決して平坦なものではなく、むしろ危険に満ち溢れたものであった。
襲い来る亜人や怪物、吸血鬼やエルフなどの先住民族、
そして何よりしつこく三人を追い回す刺客・ワールドとその黒幕であるガリア王・ジョゼフ。
そんな数多の危機を三人は勇者達と力を合わせ乗り越えてきたのであった。

その冒険の旅も、プリミルの元へたどり着くことで終わりを迎えようとしていた。
「何せ星の周りにでっかく「プリミル」って書いてあるくらいだものね」

「ああ、間違いなくこの星こそ始祖プリミルのおわす星」

「ドラン達ともここでお別れ、か。わかってはいたことだけど寂しいわね」

最初は輝いて見えたプリミルの星に相応しい白亜の街並みも、
ドラン達との別れを自覚しだすと色あせて見えてくる。

「ってちょっと待ちなさいよ、実際色あせてるじゃないの！」

「地の文にツッコムのはいくら元ネタがゴールドランでもメタがすぎないかい？
でも確かに変だね、真っ白だった街並みがなんだかだんだん茶色っぽくなって...？」

「「「な、なんじゃこりゃー!!!」」」

正に激変だった、眩しくすらあった白い街並みは一瞬で茶色い街並みに。
いうなれば白磁気が一瞬で素焼きに変わったかのようだった。
しかも暮らしている人間すら普通の人間から(°。°)って感じの簡素な顔つきの謎生命へと変化している。

「どうなってんのよ！ここプリミルの星じゃないの？」

「あ、あたしに聞かれたってわかるわけないでしょ！」

挙動不審な三人に(°。°)の一人が話しかける。

「プリミル？あんたらなに言ってるんだね、ここはプリミルじゃのーてプリシルじゃ」

「プリミルじゃ...」

「なくて...」

スカイゴルドランから受けて落ちていくハニワ（偽ブリミル）。
しかし列車は変形し人型となると空中で静止した。

「やはり立ち塞がるか、ブリミルの勇者達よ」

「そ、その姿は...」

「アドベンジャー！！？」

変形前の列車も確かにアドベンジャーの走行形態と瓜二つであったが、
走行形態自体が蒸気機関車に似た姿でありあまり驚くに値しなかった。
しかし変形後のその姿は顔が（°。°）であることと色が茶色であること以外はアドベンジャーそのものであった。

「アドベンジャーだけではないぞ！見るがいい！！」

ブリシルの叫びに呼応するように現れる三体の巨大な影。
それはスカイゴルドラン、ゴッドシルバリオン、レオンカイザーに
やっぱり顔が（°。°）で茶色であること以外は瓜二つな巨人であった。

「どうだ、黄金勇者ゴルドランを見て研究し作り上げたお前達の複製！
このブリシルの力、見せくれるわ！！」

自分のオリジナルへと襲い掛かる複製達。

スカイゴルドランは空中でドッグファイトを、アドベンジャーは重火器による撃ち合いを、
ゴッドシルバリオンは地上で力比べを、レオンカイザーは長刀による切り合いとそれぞれ違う戦いながら結果は同じだった。

「ぐわ！」

「馬鹿な！」

「偽者如きに！」

「こうもやられるとは！」

オリジナル達の敗北である。

「どうだ、これらはオリジナルであるお前達より22%強く作ったのだ！！」

「22%強く、だと！？」

「22%の力の差！思い知るがいい！！」

勇者達は懸命に偽者達と戦っているがブリシルのいうようにあらゆる面で22%上をいく

偽者相手では勝機がなく、徐々に追い詰められていく。

「パチモン作るだなんて品のない真似して！」

「オリジナリティがないわよ！！」

「まあ二次創作な僕らもパチモンみたいなもんだk」

不穏な発言をしたギーシュがルイズとキュルケから制裁という名の錬金（爆発）とファイアーボールを食らう。
いくら元ネタゴルドランでもいっていいメタと悪いメタがあるのだ、多分。

「ここは任せよ！お子達よ！！」

突如空から聞こえてきた声に上を見上げる三人。（ちなみにギーシュは焦げたままだ、丈夫な男である）
そこには鮫のような形をした物体が飛んでいた。

「あ、あれは...」

「「「ワールド！！？」」」

「違ーう！私はジャン・ジャーク・フランシス・ド・ワールドではなーい！！

正義の海賊ゼン・ゼンリョウ・フランシス・ド・イード船長だー！！」

「「「ちなみに私達も一緒にーす！！」」」

ワル...じゃなくてイードの叫びに続いて二人の女性が声を上げる。彼女達はフーケとイザベラ。
どこが気に入ったのかワルドにベタボレしてストーカーをしていたのだが色々あって今はワルドに似た面影を持つイードの元にいるのである。

その後のキャプテンシャークズによる集団暴行を眺めならルイズ達はこう呟いたそうな。

「勇者が数を頼みに自分より強い奴を倒すって正直どうなのよ？」

「だいたいクロスオーバー二次創作だからってやっていいことと悪いことがあるよね、だいたいネーミングがガイ ーの丸パクリだし」

「ってというかソースは二次創作って最低SSの基本よね」

「これからは原作だけでなく二次創作もチェックせねばならんのか、スコップが何本あれば足りるだろうか」

結局キャプテンシャーク&イードの反則技で逆転されたブリシルは地上でルイズ達の旅立ちを見ていた。そんな彼の元へハニワが一人慌てた様子でやってきた。

「大変です！ブリシル様！！次の冒険者達がやってきました！！」

「なんだと！？よっしゃー！原作的に死亡フラグな気がするけど今度こそ騙すぞ皆の者！！」

「「「「「「「「「おー！！」」」」」」」」」」」」」

「タバサ様！前方にふざけた惑星が！！」

タバサと呼ばれた少女は無表情のまま親指を立て首をかつきりながら言った。

「破壊して」